

#### 7-4-1 神道の歴史学的研究（近世）

近世神道に関する歴史学的研究は、大きく政治史・社会経済史・思想史・民衆史の各観点から行われてきたが、具体的にそれは①江戸幕府の神祇政策に関わる研究、②神社・神職等の実態に関する研究、③儒家神道・国学神道等の思想研究、④民衆宗教（後の教派神道）の研究の四者に分類される。以下、これら四者について特徴的な点を概括していきたい。①に関しては、幕藩体制の宗教政策全体と関わらせて神祇政策の位置を明らかにしてきた点に特徴がある。この結果、神道のみならず、広く仏教政策等を含めてのイデオロギー編成をどのように捉えるかが明らかにされ、従来の朱子学（儒学）を幕藩体制の支配イデオロギーとする見解に代わって、朱子学（儒教）・仏教・神道の三者の「三教一致体制」を軸に、そのイデオロギー連合によって幕藩体制の「公儀」権力・権威が構成されていることが示されてきた。朝尾直弘の將軍権力論（「將軍権力の創出」『歴史評論』二六六号等）や石田一良のイデオロギー連合論（「前期幕藩体制のイデオロギーと朱子学派の思想」『日本思想大系 藤原惺窩・林羅山』岩波書店、一九七五年所収）、大桑齊の提唱する幕藩制仏教論（「仏教思想論」『近世思想論』有斐閣、一九八一年所収）は、こうした動向を考える上で不可欠の文献であるが、これらの研究への中世における黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』（岩波書店、一九七五年）の影響も無視し得ない。②については、各地域の神社や神職の存在形態・組織について、神仏習合と関わらせて研究が進められてきたが、代表的には竹田聰洲の研究を挙げることができる（『近世村落の社寺と神仏習合』、法蔵館、一九七二年等）。ここでは、寺座や村氏神の実態が、祖先崇拜等の民俗信仰の動態との関連で明らかにされてきたが、その後の各地の地方史の編纂、神社誌・史の刊行によって、着実な成果が蓄積されてきたことを考えると、今後一層の具体的な検証の発展が期待されているジャンルであると言えるだろう。井上智勝「寛政期における氏神・流行神と朝廷権威」（『日本史研究』三六五号）のような、近世後期の大坂における氏神社の主祭神の変化の詳細な分析などが現れ始めたのも、そうした動向の一つと考えられる。③は、主として日本思想史学の研究者を中心に研究が進められてきた。何と云っても山崎闇齋学派（垂加神道）と本居宣長・平田篤胤学派（復古神道）の研究が群を抜いているが、前者については、近年の高島元洋『山崎闇齋』（ペリカン社、一九九二年）が現在の水準を示して好便であり、「神人一体」による神道の倫理化の構造が示されている。又、オームス『徳川イデオロギー』（ペリカン社、一九九〇年）のように海外でも研究が進められ、垂加神道の解釈学の「言説」の分析が進められてきていることは注目される。しかしながら、垂加神道が近世神道論に与えた影響の大きさを考えると、他の神道思想との関連や、在地にあった神職による受容の問題など、残された課題も多い。後者については、さまざまな視角からの研究が存在するが、神道論としては松本三之介『国学政治思想の研究』（新版、未来社、一九七二年）、相良亨『本居宣長』（東大出版会、一九七八年）、三木正太郎『平田篤胤の研究』（神道史学会、一九六九年）等が重要である。特に注目されるのが子安宣邦『本居宣長』（岩波書店、一九九二年）であり、ここでは、宣長の神道論の「言説」の構造が初めて問題とされ、広く近代知識人に及んだ問題が抽出されている。平田篤胤門については、門人の動向が詳しく追跡されるようになったことも成果の一つで、その研究は芳賀登『幕末国学の展開』（塙書房、一九六三年）に代表される。④は、戦後になって前進を見せた、近代以降に教派神道として編成される黒住教・天理

教・金光教等の研究ジャンルである。ここでは、最も先駆的な業績としては村上重良『近代民衆宗教史の研究』（増訂版、法蔵館、一九六三年）が挙げられるが、民衆宗教の一神教的教義、人間中心主義、内面的信仰主義等について、民衆思想の近代性格を示すものであるという高い評価が与えられた。その後、安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』（青木書店、一九七四年）等にリードされて盛んとなった民衆思想研究も、こうした村上氏の見解を発展させ、これらの民衆宗教の教祖の主体形成が更に克明に追跡されるに至ったが、現在では、小沢浩『生き神の思想史』（岩波書店、一九八八年）が、こうした動向を受けた研究である。しかしながら、こうした近代性かどうかという評価に対して、むしろ他の民間信仰との関連を重視する研究も神田秀雄『如来教の思想と信仰』（天理大学おやさと研究所、一九九〇年）や桂島宣弘『幕末民衆思想の研究』（文理閣、一九九二年）として現れてきている。

近世神道の歴史学的研究は、無論、民俗学や倫理学、神道学に成果の多くを負っているが、未だ必ずしも盛んと言える状況ではない。①～④の諸研究を総合させた視点の登場や他の学界との活発な交流によって、今後の成果が待たれていると言わなければならない。

（桂島宣弘）